萬葉拾穗抄

三之一

見龍田山死人悲傷ノ
周乃文王ノ
乃死人ヲミテ悲傷
テ葬ヲおさめこれ
ニ仁者ありとせ人
称しり聖法太子の
太悲我ありのみるや
小墾田宮御宇 おき漢
家ありてもうてまん
ヤ人家出て死ニ書
子ニてみてもむき
小山中栖遠の中り
ヤまよとにえ
度しすや山ニ被ヤ哭
乃ヲ人をせ依人
おれやもこ張

挽歌

出遊竹原井ニ時見龍田山死ノ人悲傷
御作歌一首 小墾田ノ宮御宇

上宮聖徳皇子

家有者妹之手将纏草枕
客爾臥有此旅人可怜

被死時磐余池陂流涕御作歌
一首藤原宮朱鳥元年冬十月

大津皇子

百傳ヲそのの磐余池ニ鴨ヲ
ヲ見ていれ乃池ニもこふきなくやこ

今日耳見哉雲隠去年
ヲのみヲくやもうれん

葛河内王豊前國鏡山時作歌三首

手持女王

おおきみ乃むかひまつ
鏡山ヲ宮登定流
豊國乃鏡ヲ
とこしへニ
隠雖待不来座

石ヤ立
山之
計良思
石ヤ破手カ
有者為便乃
女ニよりかも
おもひ
おもひ

親睨相哉豊國乃
とこしへ乃
いそ
くれ
ヤまさまぬ
も
得手弱す
不知苦
ヲとめみし
おもふ

ことよろふ乃ゆくての山 童蒙抄云ことよろふにハ光をおくと古来ハ石戸宮ハ石扉立る
そこにあるものかも 仙覚かくハ此心と古来童蒙抄三ハ天照大神天の
岩戸にかくれまし〳〵ける時手力雄命(タヂカラヲノミコト)彼の戸をひきあけ奉りしをいひ
か祇注ニも此歌ハあまれ岩戸あけ奉りしと云ひ山の岩戸
をあけてあまた人をもちてといへるやことよめるにて我女なれハ其二ね(カタ)すと
なゆ竹乃ことをよめる也
仙日なゆ竹とハ唐竹を
いふ也 なよ竹といふハ肉
ね通しよわくしなへて
なよ〳〵するハなよ竹の
ことよめるなりとよめるハか
くる安云ことをよる皇ひ
なりし みこハ石田王を
さすか(サニ)にへ 袖中抄云万葉
小丹(サニ)頬(ツラフ)経(サニ)蝶(ツラフ)をさす一
狭(サ)ハすゝめき也とされ

石田(イハタ)王卒(ウセシ)時作歌一首并短歌

丹生(ニフノ)王

なゆ竹乃とをよる皇子(みこ) さにつらふ(さかにつらふ)吾
（名湯竹乃 十縁(イと)皇子 狭丹頬相 吾）

おほきみハこもりくの はつせの山に
（大王者 隠久乃 始瀬乃山尓）

かみさびに いつきいますと 玉梓の
（神左備尓 伊都伎坐等 玉梓乃）

ひとそいひつる およつれか わかきゝつる
（人曽言鶴 於余頭礼可 吾聞都流）

たはことか わかきゝつるも あめつちに
（狂言加 我聞都流母 天地尓）

くやしきことの よのなかの くやしきことハ
（悔事乃 世開乃 悔言者）

あまくもの そくへのきはみ あめつちの
（天雲乃 曽久敝能極 天地乃）

いたれるまでに つえつきも つかずもゆきて
（至流左右二 杖策毛 不衝毛去而）

ゆふけとひ いしうらもちて わがやどに
（夕衢占問 石卜以而 吾屋戸尓）

みもろをたてて まくらへに いはひへをすゑ
（御諸乎立而 枕邊尓 斎戸乎居）

たかたまを まなくぬきたれ ゆふたすき
（竹玉乎 無間貫垂 木綿手次）

かひなにかけて あめなる さゝらのをのゝ
（可比奈尓懸而 天有 左佐羅能小野之）

なゝふすげ てにとりもちて ひさかたの
（七相菅 手取持而 久堅乃）

あまのかはらに いでたちて みそぎてまし
（天川原尓 出立而 潔身而麻）

をたかやまの いはほのうへに いませつるかも
（之手 高山乃 石穂乃上尓 伊座都流香物）

ばさふかへるとさふて
ちる旧説も只ニかむる
説も譯只安云人の説乃
うすろかなとと古来此
説は袖中抄かむ説云同
こつきいますいはひそ也
神(カミ)さびまゆいかへて
すこ廟に祝ひ垂也
玉つさの人 使の事也
ゆつき 只安云をとつれ
古来 字をさ風ゆつこの
ニ心仙覚ハ誑(チガ)也と子猶
也ここうるなり
あやつる 仙日およれ
ゆ心証人の言に
すをはまきんと云也

おもはしらのくやしさまの世の中にくやしさますは しかし悔まさるものこそあれといふ
何まけ中にもくいふきらぬ 倍しく（こは底に之字を脱せるならんと宣長いへり）
古義 きらぬはきらまりし字のうへにて他のあるをかきとし
なかりきらく なぬかくうちしすてに灰ちりすとのみありしかし 七行とは
七夜すとに至乃ちかまぬ世くはらしきてまくし 夕瀾占とよめるはしいふ
みとろをまてく（衍字也）社をとさく 枕詞は枕とすべしといひ（衍字）おほこ
おもよあるさきらの小野 此集六二月をいらく（其を云ふ）同十六に七行めゆふあるさく
らの小野よちらゆやりとまる天上乃ホの名也 下與乃なさに准て天にも河野あると云
るく見ゆ 中臣祓に天乃菱菖とかの神茅原より天乃小菅そしいふ類まらへ
し七み菅とは下に天の河原とかれば七夕の心にも七を用也 又安は七菅の斜にて菅を
何よれのうへに立むく 御殿にて何原かく すれはあるし（て其の何か
ともや里よめり 何めに何る何らのきよの岩屋に移りく 下の首尾也
心は何し ね床わくとし流祓し 汀ん極とこの神也 接職に七夕にての
川原に七夕の位のやうにと流祓にはさすとしもとあるは別のもの也 自然
こしもせし何るもや 押にもちての心は石田王神殿に葬也 かさめくにお
りすとも至言の如よ吹つるは凡ゆりまくのことなやん 押は勝まさるとく

流殺し おきともせん物として他世にかけ悔まるは 他のうこにて他の極
まてる承あくもく斜しとひトもし 宮に社をとてく 宣長説よりす
きもし て何原の香久移くして何原は流殺をまてこす（字殿をまくる
るよいせくうせめひくはまるは山の崗のう（言ゆつるなるあく）初
断出に麻と立てくて也

421
反歌

逆言之 狂言等可聞 高山之 石穂乃上爾 君之臥有

およつれのたはこととかもたかやまのいはほのうへにきみかこやせる

何くとやのゆうくもく面かくとうせる石田王のと殺くく いと思王都のし也

422
石上 振乃山有 杉村乃 思過倍吉 君爾有名國

いそのかみふるの山なる杉むらのおもひすくへききみにあらなくに

いそのかみふるの山なる上あるに序也 杉を見るかにいけてといふ也 うつきこるとうの也

423
石田王卒時哀傷作歌一首并短歌

山前王

角障經 石村之道平 朝不離

流のさはるいはれの也 石といふん枕詞よ角さはるといふ石村にて

つのさはふいはれのみちをあささらす

将歸入乃念作通討萬反
おもひつゝなげけども
霍公鳥鳴五月者菖蒲
かつらきすぎてさつきまつ
花橘乎玉加貫交
あやめぐさ
見物を
一云ぬきまじへ
蔓介将為登九月能四貝礼能
もみつまでとかくれにさく
時者黄葉乎折挿頭跡
こさけども
延葛弥遠永
ちとせをかねて
一云田
葛根乃弥遠長
すゑのよやこと
萬世介不絶等念而
よろづよに
一云大伴之念懽而
一云おもひたのしみ
君
將通
君乎懸明日従
きみをかけ
平従明日者
あすゆりは
外介可聞見牟
よそにかもみむ

一云此一首柳本朝臣人麻呂作也

反歌

一云紀皇女薨後山前王代石田王作之

隠口乃泊瀬越女我手二纏在
こもりくの
玉者乱而有
たまは
不言八方
いはずとも
河風寒
かはかぜさむし
公之阿流久尓似人毛逢那
きみがあるくに
にる人もがも
一云君乎懸明日従

平従明日者
あすゆりは
外介可聞見牟
よそにかもみむ

一云此一首柳本朝臣人麻呂作也

反歌

一云紀皇女薨後山前王代石田王作之

隠口乃泊瀬越女我手二纏在
こもりくの
玉者乱而有
たまは
不言八方
いはずとも
河風寒
かはかぜさむし
公之阿流久尓似人毛逢那
きみがあるくに
にる人もがも

寺の心ハおのもゝ〳〵なれども神さひたるハいつきまもるなり石田王を
彼山にうしなひたるハ動乱と女の手の介されかゝるなり
一云紀皇女薨後ニ山ニ従ハ紀皇女のうせたるとき玉に祝てこゝに
なくなのそをさゝつせ石田王うせたるハ長谷川の粛然たるとき彼

伊小仏(ヰヲブツ)ま人(ビト)ふあ(ア)へ(エ)りと(ト)いふ(フ)る面(オモテ)也(ナリ)一云紀皇女(キノヒメミコ)の歌(ウタ)まくら(ラ)も義(ギ)は同(オナ)しくは(ハ)所(トコロ)かくる(ル)ことゝ(ト)もなりてこゝ(コヽ)のやう(ヤウ)に誰人(タレヒト)乃書(カキ)もとゞめ(メ)ん故(ユヘ)なき(キ)を推(オシ)ていへ(エ)り

見香具山屍悲慟作歌一首

柿本朝臣人麻呂

草枕　羈宿尓誰嬬可國忘有家待莫國

田口廣麻呂死時作歌一首

刑部垂麻呂

百不足　八十隅坂尓手向為者過去人尓蓋相牟鴨

土形娘子火葬泊瀬山時作歌

一首

柿本朝臣人麻呂

隠口能泊瀬山之山際佐雲尓伊佐夜歴雲者妹鴨有牟

火葬(クワソウ)泊瀬(ハツセ)山(ヤマ)時(トキ)柿本朝臣人麻呂作歌

一首

際従出雲児等者霧有哉

吉野山嶺微

八雲立出雲子等黒髪者吉野川奥名豆颯

過勝鹿真間娘子墓時作歌一首并

ちんといふ(フ)ことをひろ(ロ)ひ山(ヤマ)ふ(フ)その心(ココロ)はいと(ト)坂(サカ)小屋(コヤ)丸(マル)りこゝ(コヽ)ろ(ロ)ふ(フ)もの哀(アハレ)ひ霊魂(タマシヒ)うけ(ケ)くみ名(ナ)乃こと(コト)

いさよひ立(タツ)やすらふ(フ)も猶(ナホ)土形娘子(ツチカタノヲトメ)の事(コト)を思(オモ)ひて菜煙(ナケブリ)といさよふ(フ)ともよめり雲乗山(クモノリヤマ)乃名(ナ)乃心(ココロ)もて

溺死出雲子吉野(ヨシノ)の小溺(コオボレ)

ものそといふ(フ)もの山の小(ヲ)やの如(ゴト)くに(ニ)て寄心(ヨルココロ)は火葬(クワソウ)の煙(ケブリ)の心(ココロ)

なく(ク)とも(モ)よ(ヨ)ろ(ロ)しきの(ノ)こと(コト)

なり溺死(オボレシ)とよめり後(ノチ)

短歌 東俗語云可恒思 知 能 麻末 能 必 胡

山部宿禰赤人

古昔 有 家武 人 之 倭文幡 乃
帯解 替 而 廬屋 立 妻問 乃
為家武 勝 牡鹿 乃 真間之手兒 名之 奥
榛 乎 此間登波聞 将 真木 葉哉
茂 良武 松之根也 遠
寸 言 耳 毛 吾 者
不所忘
勝 牡鹿 乃 真間之手兒 名之 奥
処 有 良武 松之根也 遠
寸 言 耳 毛 名耳 毛 吾 者

集九三鹿乃子ろ井ふみとゞめ女ところてこゝあるゝ女乃袖し真女ところゆ
なきつき仙日墓しるまゝ山女の墓の松社ゆゑしとゝあるを まゝの髪や墓ゐ
見ん松根をとゝろあゝ をゝくさゝいは乃根を多くゝをてこゝ
おゝろ乃をゝくさゝいは乃根を多くゝをてこゝ
吟ゝこゝ表れ三

反歌

なゝも名乃人ゝも笑ん山ところ恋ゝ名ゝ
山ところ恋ゝ名ゝ

吾毛見都人 尓毛 将告 勝 牡鹿 之
間間能手纪名之 奥 津城 處
勝 牡鹿 乃 真真乃入江 尓 打 靡
玉 藻 川 派 手纪名志 所念

和銅四年辛亥見姫島松原美人屍(ノ)哀慟作歌四首

河邊宮人

姫嶋松原 拆洗お洗

和麻晴夜能美俾乃浦廻之白管仕
かさゝやの今乃
栂濃乃三穂乃浦よ
や但八空物六風母の
美保浦ハ磯ノ
松原
松不姫待乃松原
てのみれハ一本栂
をみ乃浦日乃今れハ
みりのうとうん潤
小風母のとよめるや
白つしみも寒心哉
之川くくめのみ
端と
日本紀三こうくし倶梅
のことがあさとうと神
武天皇の此歌の初
くめのみ子ふりの三種の
ことものをけきぬとう

見者悲霜無人思丹
見津見津四久米能若子我伊觸家牟
之河岸
妹毛吾毛清
妹矛可悔心者不レ持

人言之繁比日玉ノ者
手布巻以而不戀有益薄
妹吾毛清之河岸
妹矛可悔心者不レ持

神龜五年戊辰思戀故人歌三首 上一首別
去而經數旬作之 下二首臨近
尚京時作之

太宰帥大伴卿

愛人之纏而師敷細之
うたてきひものすきて
吾手枕平纏人将有哉
應遅時成来京師尓而
誰手本平可吾
枕将有哉

せんとく宰府の女をよみ
思へる也
みやこなるあれたる家にひとりねは
旅も宰府を皆思ふ心深し
おもひしは人に別くこ
人はくはその心なるへし
右二首ハ上京せし時
のうたくよめるなり

在京師荒有家尓一宿者
益旅而可辛苦

みやこなるあれたるへにひとりねは
まひりまさりてくるしかるへし

神亀六年己巳左大臣長屋王賜死
之後作歌一首

倉橋部女王

大皇之命恐大荒城乃
時尓波不有跡雲隠座

すめろきのみことをかしこみおほあらきの
ときにはあらねとくもかくれます

左大臣長屋王賜死

紹運録曰天平元年神亀六年二月依誣反讒言為聖武天皇被誅　續日本紀曰二月辛未左京人漆部造君足中臣宮處連東人等告密称左大臣正二位長屋王私学左道欲傾國家其夜遣使固守三關因遣式部卿藤原宇合衛門佐佐味忠麻呂左衛士佐津嶋家道右衛士佐紀朝臣佐比物等將六衛兵圍長屋王宅　壬申巳時遣一品舍人親王新田部親王大納言多治比真人池守中納言藤原朝臣武智麻呂等就長屋王宅窮問其罪　癸酉令王自盡其室二品吉備内親王男従四位下膳夫王無位桑田王葛木王鈎取王等同亦自縊

すめろきのみことをかしこみ　仙日かかりかきのときは人の死期をいふ又安田死期ありてものゝ何ゆきまきし　王京神代おほむ人の死ぬるをかみやかたのゆうきのゝ君命をさまて死ぬる期ありあれも云われとに書しく讒言にてこも身をかくせまゝをぬすき　つるいそうくいつまれてくとし死とあり

悲傷膳部王歌一首

世間者空物跡将有登曽
此照月者満闕為家流

作者未詳

世のなかはむなしきものとあらむとそ
このてる月はみちかけしける

膳部王　膳夫王とかけり
長屋王の男　お注
世のかりそめしきものさ
又安く満闕　生死の
二つのことし人間一栄
一落すへく　世上無常
のことわりなるを
又せんとて月ハ盈虚
まことふや　左保の大臣

天平元年己巳攝津國班田史生
文部龍麻呂自經死時作歌一首

位ハ二品より一品まで臣ハ三
公乃貴きからニ王子
膳夫王位四品なりしに
単宣の身なりしかる
世のみりさゑむまつさ
ありるよしなるへし

攝津國班田史生
續日本紀十一日聖武帝天平元十一月癸
巳任京及畿内班田司
口分田をわかちあたへさせ
小班田司と任せらるゝ史生
しき…萬葉集卷十六番
班田ハ田をわかつとむ諸家
自經死　經死ハ縊と同
…むかへて
…天ハうつ…おと

并短歌

判官大伴宿禰三中(ミナカ)　万三下四十九

天雲之向伏國武士登
あまくものむかふすくにのものゝふと
所云人者皇祖神之御門尓
いはるゝ人はすめろぎの神のみかどに
外重尓立候内重尓仕奉玉葛(カヅラ)
とのへにたちさもらひうちのへにつかへまつり玉葛
弥遠長祖名文継徃
いや遠長くおやの名もつぎゆく
物與母父尓妻尓子等尓語
ものとおもちゝにつまにこどもにかた
而立西日従帯乳根乃
らひてたちにし日よりたらちねの
母命者齋忌戸乎前坐置而
母のみことはいはひべをまへにすゑおきて
一手者木綿取持一手者
ひとてにはゆふとりもちひとてには
和(イ)細布奉平間幸(イ)座与
にぎたへまつりたひらけくまさきくませと

もて…　天地乃
霞(ウホヒ)載…
いはるゝ人ハ竜丸をさす
…外重(トノヘ)ハ禁
門乃外…の心丸
内重ハ禁中の内の事
の心…安云内なる
…
玉葛 いや遠長く 玉葛
ハ枕詞…遠
おやの名をつぎゆく 先祖
の名聲を…とす
まく天事を…と云
立にし日より 班田
司…母の
竜丸を…安全と

天地乃神祇乞祷何
あめつちの神にこひのみいか
在年月日香茵花香
ならんとしの月日かつゝじ花にほへる
君之牛留鳥名津匝來與
君がにほ鳥のなづさひこんと
立居而待監人者王
たちてゐてまちけん人はおほきみ
之命恐押光難波
のみことかしこみおしてるなにはの
國尓荒玉之年經左右二
くにゝあらたまのとしふるまでに
白栲衣不干朝夕在
しろたへのころもほさずあさよひにあり
鶴公者何方尓念座可
つる君はいかさまにおもひませか
欝蟬乃惜此世乎露霜
うつせみのをしき此世をつゆしもの
置而徃監時尓不在之天
おきてゆきけんときにあらずして

ゆくゆるを待けむと母乃命ハ母をいつきて云詞 此の命とも云り
和細布(ニキタヘツヌ) わきたへハやはらかなる布也 和多(ニキテ)ハ麻也 其ものハぬさなどにもちゐる 音信也
こひのみ 祈願するなり 祈ル詞ニ手向ることを云をとめて いつくしみ
いふ詞也 ひとみおもハ真乎言えの枕詞 網ハ列携(タヅサ)持なれバ也 いつくしみ
竜丸ハ有けむと云し かくもまもらんと也 待乃人竜丸を云
まてるや 難波の枕詞 王命をつとめて摂津の班田司と称する
家乃やうす ますらをか力をなくせし云也 行けるきみ竜丸乃
いふに物に聞いまして 物にも我を思ふといひ 家へとおもひし人
乃母とおもひく世を思へるさまなり うつせみの此世といふ枕詞
露霜のハ消えし乃枕詞 おいてかきせを捨まし 自経し死たる人をいふ
時にすぐるを まさはりて天命をもまたで 死るをいふ 定朝ちぬね
とかくいひて 此歌
牛留鳥 名ハ二と添従にて
きのふこそ君ハありしか
かりしめなる死をと
せしとかしむ也

反歌

444 昨日社公者在然不思尓濱松之上於雲棚引
きのふこそきみハありしか おもはぬに はままつのうへに くもにたなびく

445 何時然跡待牟妹尓玉梓乃事太尓不告往公鴨
いつしかとまつらんいもにたまづさの ことだにつげずいにしきみかも
いつしかと待らん妹 此人の妻子に情思ふ事
ことしなくて也

天平二年庚午冬十二月向京上道之時作歌五首 上三首過鞆浦日作之下二首過敏馬埼日作之

太宰帥大伴卿

446 吾妹子之見師鞆浦之天木香樹者常世有跡見之人曽奈吉
わぎもこがみしとものうらのむろの木ハ とこよにあれど見し人ぞなき

447 鞆浦之礒之室木将見毎相見之妹者将所忘八方
とものうらのいそのむろのき見むごとに あひ見し妹ハわすらえめやも

448 礒上丹根蔓室木見之人乎
いそのうへにねはふむろの木見し人を

鞆浦(とも) 八備後二備後を
敏馬埼 摂津の名也
わぎもこがこの
此歌五首帥大伴卿上京の時
の歌也 王粛任りかどひさしき
妻をもろともに任に入のか
くて帰んに此妻の死せしハ
みるをとて感衆推なり
此てこよ世ハとき也
さもろうしのいそのむろ
心なく
いそのうへにねはふむろ

何在登問者語將吉流可
いりなりと
妹與妹来之敏馬能乎遅
妹こう見ねばさきを口つるさよ
獨而見者淨具未之毛
ひとりこそ見れをありこそも
去尓波二吾見之埼乎
くさかいみもわれ見しやさきを
獨過者情悲喪
いとりすぎにこころもるしも

一云見毛尓可受伎嬬
一云見毛尓可受伎嬬

遅入故郷家即作歌三首
遅カリテ入ニ故郷ノ家ニ一ニ即チ作歌三首

人毛奈吉空
なきそらに
旅尓益而辛苦有家里
旅ゐ益而辛苦有家里
與妹為而二作之吾山齋著
いもとせりて作之吾山齋ハ

未高繁成家留鴨
まこもしげりかくるもる
吾妹子之植之梅樹毎見
わもさこうへし梅の木見るごとに
情咽都追淫流之
こころむせつつるるかも

天平三年辛未秋七月大納言大伴
卿薨時歌六首上五首資人金明軍
不勝犬馬之慕心中感緒作之下一
首勅内禮正賜大養宿禰人上使喚
讀卿病而醫藥無驗逝水不留因斯
悲慟即作之
資人金明軍

愛八師榮之君乃伊座勢波
うえやしさうしきみのいませば

昨日毛今日毛吾平召麻之手
きみがしもわれをめさばも
如是耳有家類物乎茅子花
つのがみをそろへまきなばも
咲而有哉跡問之君波母
ちまさくのりてしあらましを
君尓戀痛毛為便奈美蘆鶴之
きみがこいたもすべなみあしたづの
哭耳所泣朝夕四天
ねのみなかゆあさよひみて
將仕物常念有之
達ことをものくしたしんおもふらむ
君師不座者心神毛奈思
きみしまさねばこころしもなし
弱子乃匍匐多毛登保里朝夕哉
わかこのはひたもとほり朝夕にも
哭耳曽吾泣君無二四天
ねのみぞわがなくきみなしにして

内禮正縣犬養宿祢人上

昨日毛今日毛吾平召麻之手
きのふもけふもわれをめさばも
如是耳有家類物乎茅子花
かくのみをそろへまきなばも
咲而有哉跡問之君波母
ちまさくのりてしあらましを
君尓戀痛毛為便奈美蘆鶴之
きみがこいたもすべなみあしたづの
哭耳所泣朝夕四天
ねのみなかゆあさよひみて
將仕物常念有之
達ことをものくしたしんおもふらむ
君師不座者心神毛奈思
きみしまさねばこころしもなし
弱子乃匍匐多毛登保里朝夕哉
わかこのはひたもとほり朝夕にも
哭耳曽吾泣君無二四天
ねのみぞわがなくきみなしにして

見礼杼不飽伊座之君我黄葉乃
これどあかずいませしきみがもみちの
移伊去者悲喪有香
うつりいにけばかなしもあるかも

悲嘆尼堪歌一首并短歌

大伴坂上郎女

新羅國尼名曰理願也遠感王徳歸
化聖朝於時寄住大納言大將軍大
伴卿家既經數紀也以天平七年乙
亥忽沉運病既趣泉界於是大家石
川命婦依餌藥事往有間温泉而
不會此喪但即女獨葬送屍柩既

仕人乃心於荒
つかへびとのこころをあらみ
又安云其弱子乃
またやすしといふそのわくごの
弱子乃匍匐多毛登保里
わくごのはひたもとほり

これこおくすいませ
おくすいませ君乎
まつとし黄葉乃移乃
もみちのうつろひの
移伊去者悲喪有香
うつりいにけばかなしもあるかも

遠感王徳歸化聖朝
日本乃王徳感發而
經數紀也
趣泉界黄泉也
石川命婦 筑人の書之

依餌藥事 病氣養生
楮角(クヂノツノ)乃新羅(シラキ) 日本紀(ニホンギ)裏
加曰 楮令新羅(コウゾヲシラキニツカハシ)されて
もてきといいんとて楮
角持來(ツノモチキタ)ると云楮來(コウゾモチキタ)ると
白き處 楮角白き角
人ことをとりて
此歌を新羅
そしりたることなれば人
の笑ふ歟の吾歟(ワレカ)きと
うち日さす(ウチヒサス)みやこ
仙台宮殿(センダイキウデン)にて月
楮(カウゾ)を題(ダイ)して
文選(モンゼン)十一景福殿賦(キヤウフクデンノフ)曉
光内照(ケイクワウナイテラス)流景外燭(リウケイグワイヲテラス)
註晨光日景也 日光

照於室中而流景外
發燭起也
奥儀抄(オウギセウ)に
古(イニシ)へ人のこと
ども大家石刀(タイカセキタウ)命婦(メイフ)依餌藥
事(ヤクジニヨリテ)往有間温泉(アリマノオンセンニ)とある
さる川をそりて
死(シ)のりと出(イ)のやう

訛(ナマリ)仍(テ)作(ツクリ)此歌贈温泉(ヲオクル)

楮(カウゾ)乃(ノ)角(ツノ) 新羅(シラキ) 國從人車(クニヨリヒトクルマ)乎(ヲ)
引(ヒキ)來(コ)之(シ)乃(ノ)毛(モ) 比(ヒ)登(トヲ)許(コ)等(トヲ)
吉跡(キトテ) 所聞而(キコエテ) 開放流(ヒラケタル) 親族(ウカラ)兄弟(ハラカラ)
與(ト)喜(キ)麻(マ)久(ク)流(ル) 波(ハ)之(シ)可(カ)母(モ)
無國尓(ナキクニニ) 渡來座而(ワタリキマシテ) 大皇之(オホキミノ)
數座國尓(アマタマスクニニ) 内日指(ウチヒサス) 京思美(ミヤコシミ)
左(サ)麻(マ)尓(ニ)波(ハ) 多(タ)奈(ナ)加(カ)里(リ)家(ケ)牟(ム) 可(カ)母(モ)
弥(イヤ)尓(ニ)里(サト)家(ケ)者(バ) 左波尓(サハニ)雖在(アレドモ) 何方(イカサマ)
尓(ニ)可(カ)念(オモヒ)
縞目鴨(シマメカモ) 鄕礼毛奈吉(サトレモナキ) 佐(サ)
保乃山邊尓(ホノヤマベニ) 哭子成(ネコナル) 慕(シタヒ)
保乃(ホノ)山邊尓(ヤマベニ) 細(クハ)乃(ノ)宅乎毛造(イヘヲモツクリ) 荒玉乃(アラタマノ)
而布(テフ) 年緒長久住(トシノヲナガクスミ) 座之物乎(マシモノヲ)
宇(ウ)良(ラ)乃(ノ)
宇(ウ)良(ラ)乃(ノ)

生者死(イケルヒトハシヌ) 玉車尓(タマクルマニ) 不免(マヌカレ)物(モノ)
伊(イ)介(ケ)流(ル)人(ヒト)毛(モ) 志(シ)禰(ネ)登(トヲ)母(モ) 母(モ)奈(ナ)礼(レ)禰(ネ)波(ハ)
加之(カシ) 有者(アルハ) 也(ヤ)憑有之(タノメルノ) 人乃(ヒトノ)盡(コト)
見(ミ)而(テ)毛(モ)
有(アル)尓(ニ)波(ハ)有(アル)可(カ)奈(ナ)
客(タビ)有(アル)間尓(マニ) 佐保河(サホガハ) 朝(アサ)河(ガハ)
渡(ワタル) 春日野乎(カスガノヲ) 背向尓見乍(ソムキニミツツ) 足(アシ)
引乃(ヒキノ)
山邊乎(ヤマベヲ) 指而曉闇(サシテアカツキヤミ) 隠(カクレ)
水木乃(ミヅキノ)
益去礼(マサリユケバ) 特言(コトサラニ) 為使(ツカヒヲナシ)
背為(ソムケテ)須敝不知尓(スベシラニ) 痛(イタク)
戀(コヒ)
白細之(シロタヘノ) 衣(キヌ)
袖不干(ソデヒヅ) 嘆(ナゲキ)乍(ツツ) 吾泣涙(ワガナクナミダ)
有間山(アリマヤマ) 雲居輕引(クモヰカルビク) 雨尓(アメニ)零寸八
跡(ト)
反歌

留不得壽尓之在者敷細乃
家従者由而雲隠去寸
いへゆきていてくもしのれかすさ

天平十一年己卯夏六月悲傷
七婦作歌一首

大伴宿禰家持

従今者秋風寒
将吹烏
如何
獨長夜平将宿

いかにかひとりながよをわんと

即和歌一首

穿大伴宿禰書持

長夜平獨哉将宿
跡君之去者
過去之人乃
数毛不在

ながきよをひとりやねんときみしいなば
すぎにしひとのかずにもあらなく

見二砌上瞿麥花一作歌一首

大伴宿禰家持

秋去者見
跡妹之植之
屋戸乃石竹
開

あきさらばみむとわぎもこがうえしやどのなでしこさきにけるかも

移朝而後悲嘆秋風一作歌一首

蟬之
代者無常
跡知物乎
秋風
寒
思努婇
都流可聞

うつせみのよのつねなきとしものを
あきかぜさむみしのひつるかも

一首并短歌 家持

吾屋前尓
花曽咲有
其平見
不
情毛
八師
妹之有

わがやどにはなぞさけりそれをだに
こころもゆかずやかいもがありし

世渡水鴨成二人雙居
ふせてみるすみうちきいぬ
手折而毛令見麻思物乎打蟬乃
こおりてしあへもえ物をうつ蝉の
借有身在者霜消去之
かりの身なれいとけ雲乃まゆく
如久足日木乃山道乎指而
こうく長ひさ乃やちとさして
入日成隠去可婆曽許念
入り日をかれるのうつそこ
不胸已所痛名付
ひなむねそつめいひもつけ
毛不知跡無世間尓有
もしらとなきよ乃なかおも
者将為須辨毛奈思
まをせんとへともな
反歌
時者霜何時毛将有平情哀
ときはしもいつもあらんをこころ

こをきそとつる衆
一へるや時いつもとも
さふうるおすもを
りいゆる世の
そくゆるきよせい
時うせと歌も拾
よそく風も吹
うんねやと
時うくゆるよさく
我妻持の同やもこひぬ
よいつしかほすこひを
時うくも花の着ほと
ゆくこの手折りくる
ゆくの手をくる
くる世間やとと
いへさりいますも

吾妹可若子平置而
出行道知赤世波殘
妹平将留鑒毛置赤思平
妹之見師屋前尓花咲時者経去
吾泣涙雨尓赤ニ干
わくるまてにいるひる

悲緒未息更作歌五首

如是耳有哉留物平妹毛吾毛
如千歳ちとせ乃こくくるの手折りくる物を妹も将見
離家伊麻須吾妹平停不得
いへさりいますわもをとめぬね

山隠 都礼 情神 毛奈思
やまかくれつま つれもの
世間之 常 如此 耳跡可都知 跡
世のなかの みにねるくの みとろかれと
痛 情 者 不恐 都毛
いたもこころそ おのひりおつる
依保山 尓 多奈引 霞
さほやまふ にまひく 霞
妹平 思 出 不泣 日者 無
妹をおもいてなくひは なし
昔 許曽 外 尓毛 見之加 吾 妹子之
むかしこそよそにもみしか わかもこの
奥 柳 常 念 者波之吉 依寶 山
おきつもいそさやま
天平十六年甲申春二月安積皇子薨時作歌六首 上三首二月三日作之下三首三月二十四日作之
内舎人大伴宿祢家持

中納言正三位兼式部卿藤原朝臣豊成
安積皇子 聖武皇子 薨
なきいもかこころをしのひ
かなしきいもかこころをしのひ
万代 尓 知 麻 之 哭 無
よろつよにしらましなきこ
久迩乃京 日本 乃 久迩 乃 京
くにのみやこ
倶 集 十七 山 柴 乃 久 乃
こととひもとめし
皇 乃 御 門 日本 乃 久迩 乃 京
すめろきの みかとの くにの みやこ
見 不 飽 毛 有 鴨
みれともあかぬかも
久迩乃京 乃 荒 墅 矣 悲 見 跡 作 流 歌
くにのみやこの あれたるを かなしみみとつくれるうた
布 当 乃 野 尓 打 靡 春 菅 乃
ふたきのの にうちなひく すかの
年 之 経 去 者 立 隠 障 来 流
としのへぬれは たちかくるまて
山 遠 尓 波 花 咲 平 為 里 河 湍 爾 波 年 魚
やまとをは はなさきたひら かはせには あゆ
小 狭 走 弥 日 異 僧
をさはしる いやひことに
逆 言 之 枉 言 登 和 聞 白 細 尓 舎
さかことの まかことと しらたへに
人 驟 来 而 告 都 礼 者 立 之 而 居 而 毛
ひとのはしりきて つくれはも たちてもゐても
久堅 乃 天 所 知 奴 礼 屡 転
ひさかたの あめしらぬれ しばたたく
泥 打 雖 泣 将 為 須 便 毛 奈思
ひちうちなけと せむすへもなし

反歌

吾王 天 所知 牟 登 不思 者
わがおほきみ あめ しらせむと おもはねば
於保尓 曽見 豫流 和豆香 蕪麻山
おほにぞみよる わづかなるま山

足檜木乃 山尓倍 光 咲花乃
あしひきの 山にへ 照 咲花の

散去 如寸 吾王 香聞
ちりゆくごとき わがおほきみかも

右一首 春日祭 使 参 来 之 時 作 歌 者 未 詳

朝狩尓 鹿猪踐 起 暮狩尓 鶏雉履 立
あさがりに ししふみおこし ゆふがりに とりふみたて

大御馬之 口柳 駐 御心乎
おほみまの くちやなぎとめ みこころを

吉 見為 明 来之
よしと見為て あけこしも

治道 乍 山 木 立
をさなせと おもへるやまに こだちしげ

之繁 尓 咲花毛 移
しげきに さくはなも うつろひぬれば

世間者 恃尓 有家里
よのなかは たのめにありけり

心振 起 飯 乃 腰 取 而
こころふり おこし いひの こし とりて

佩 大刀 之 緒 引 懸 而
はける たちの を ひきかけて

梓 弓 靫 負 而 天
あづさゆみ ゆぎ おひて あめ

地 與 弥 遠 長 尓 萬 代 尓
つち とともに いやとほに ながく よろづよに

如此 毛 欲得 跡 憑 有之
かくも がもと たのめりし

皇子乃御門 之 侍 伊 奈 美
みこのみかど の さもらひ いなみ

反歌

吾王 天 所知 牟 登 不思 者
わがおほきみ あめ しらせむと おもはねば

於保尓 曽見 豫流 和豆香 蕪麻山
おほにぞみよる わづかなるま山

足檜木乃 山尓倍 光 咲花乃
あしひきの 山にへ 照 咲花の

散去 如寸 吾王 香聞
ちりゆくごとき わがおほきみかも

右一首 春日祭 使 参 来 之 時 作 歌 者 未 詳

朝狩尓 鹿猪踐 起 暮狩尓 鶏雉履 立
あさがりに ししふみおこし ゆふがりに とりふみたて

大御馬之 口柳 駐 御心乎
おほみまの くちやなぎとめ みこころを

吉 見為 明 来之
よしと見為て あけこしも

治道 乍 山 木 立
をさなせと おもへるやまに こだちしげ

之繁 尓 咲花毛 移
しげきに さくはなも うつろひぬれば

世間者 恃尓 有家里
よのなかは たのめにありけり

心振 起 飯 乃 腰 取 而
こころふり おこし いひの こし とりて

佩 大刀 之 緒 引 懸 而
はける たちの を ひきかけて

梓 弓 靫 負 而 天
あづさゆみ ゆぎ おひて あめ

地 與 弥 遠 長 尓 萬 代 尓
つち とともに いやとほに ながく よろづよに

如此 毛 欲得 跡 憑 有之
かくも がもと たのめりし

皇子乃御門 之 侍 伊 奈 美
みこのみかど の さもらひ いなみ

反歌

吾王 天 所知 牟 登 不思 者
わがおほきみ あめ しらせむと おもはねば

於保尓 曽見 豫流 和豆香 蕪麻山
おほにぞみよる わづかなるま山

足檜木乃 山尓倍 光 咲花乃
あしひきの 山にへ 照 咲花の

散去 如寸 吾王 香聞
ちりゆくごとき わがおほきみかも

右一首 春日祭 使 参 来 之 時 作 歌 者 未 詳

朝狩尓 鹿猪踐 起 暮狩尓 鶏雉履 立
あさがりに ししふみおこし ゆふがりに とりふみたて

大御馬之 口柳 駐 御心乎
おほみまの くちやなぎとめ みこころを

吉 見為 明 来之
よしと見為て あけこしも

治道 乍 山 木 立
をさなせと おもへるやまに こだちしげ

之繁 尓 咲花毛 移
しげきに さくはなも うつろひぬれば

世間者 恃尓 有家里
よのなかは たのめにありけり

心振 起 飯 乃 腰 取 而
こころふり おこし いひの こし とりて

佩 大刀 之 緒 引 懸 而
はける たちの を ひきかけて

梓 弓 靫 負 而 天
あづさゆみ ゆぎ おひて あめ

地 與 弥 遠 長 尓 萬 代 尓
つち とともに いやとほに ながく よろづよに

如此 毛 欲得 跡 憑 有之
かくも がもと たのめりし

皇子乃御門 之 侍 伊 奈 美
みこのみかど の さもらひ いなみ

（以下前又其中一也）

さてゐます 蝿のさわ
やかさとくくとよふ
へき秋沼 五月蠅 日本紀
きろくよおろかなり
も葬のさま
えおもひうるよし 考
昔の俤をしのぶ
者もあるよしにて
乃日あるかりとそ
れは遊行するとき
そのことを
敬ふや
心をいくちと同さ
れ
かなとうたをよめり

乃 五月蝿 成 驟 驟 舎人 者 白
さわ なす さわくとおもへ
栲 尓 眼 取 著 而 宿 有 之
よこそもらまくにねもらし
咲 比 振 麻比 弥日異 更 経 見
えやしるまいやしくおろかなる
者 悲 百 可聞
きはかなしめおもふ

反歌

波之吉 可聞 皇子之 命
もちまつ 乃 安里我欲比
見之 活 道 路 波 荒 尓 鶏 里
大伴之 名 負 靱帯 而 萬代 尓
憑 之 心 何所 可 将 寄
みこころをいつくにかよせん

悲傷死妻作歌一首并短歌七月廿日作之

高橋朝臣 氏 麻呂

白細之 袖指 可倚 妻 寝
吾 曇 髪 乃 真白 髪 尓 成 極
おもひくろかみのましろかに
新 世 尓 共 尓 将有 跡
おもひてしたふたりねんと
玉 緒 乃 不絶 射 妹 跡 結
しかれとのあをしかも
而石 事者 不果
てこころはしまさす
心 者 不遂 妙 之手本
こころをみす

（以下前又其中一也）

おもふも乃名尓対
靱 手 靱とともに弟
は大きものの名なれはゆきこもりてといふ 物なるへうよりてとよめり
とこひしれとそらくるしくこもりゐて心
高橋朝臣 或本云但云奉
膳之男子焉 膳 夫
奉膳 内膳 正 同
内膳は高橋世々伝
神さひて世 髪の白
成極りて改まる世
もれやちんらの心
偕老と契る
さと妹 中君は
契りて

矣剛毋将犬尓之家従裳出而
乎波礼布久之美家従裳出而
乎波礼布久之美
乎波礼布久之美

妹乃哭乎毛置而朝霧
妹乃哭乎毛置而朝霧
妹乃哭乎毛置而朝霧

髣髴為乍山代乃相樂乃山乎
髣髴為乍山代乃相樂乃山乎
髣髴為乍山代乃相樂乃山乎

越奴礼婆将云為便
越奴礼婆将云為便
越奴礼婆将云為便

吾妹子跡宿之
吾妹子跡宿之
吾妹子跡宿之

庭出立偲
庭出立偲
庭出立偲

居嘆
居嘆
居嘆

腋按
腋按
腋按

舎人
舎人
舎人

雄自毛能
雄自毛能
雄自毛能

負見抱
負見抱
負見抱

哭耳泣
哭耳泣
哭耳泣

雖戀
雖戀
雖戀

辭不聞
辭不聞
辭不聞

物尓波在跡
物尓波在跡
物尓波在跡

吾妹子之
吾妹子之
吾妹子之

山平
山平
山平

鹿跡叙念
鹿跡叙念
鹿跡叙念

反歌

打着見乃
打着見乃
打着見乃

世之事尓在者
世之事尓在者
世之事尓在者

外尓見之
外尓見之
外尓見之

山矣那
山矣那
山矣那

今者
今者
今者

鹿跡思波宇
鹿跡思波宇
鹿跡思波宇

朝鳥之啼耳
朝鳥之啼耳
朝鳥之啼耳

吾妹子尓
吾妹子尓
吾妹子尓

今更
今更
今更

逢因矣無
逢因矣無
逢因矣無

萬葉集巻第三終

負、享元年七月二十四日於新玉津島神前重而書墨付五十九枚